

きみに届く声

2008(平成20)年9月23日鑑賞(梅田ブルク7)

★★★



監督＝塩屋俊／原作＝渡辺淳一『少女の死ぬ時』(朝日新聞社刊)／出演＝真木大輔／杉本哲太／戸田菜穂／寺島咲／西岡徳馬(エイベックス・エンタテインメント配給／2008年日本映画／96分)

第3章

意外な設定が興味をひく

……渡辺淳一の短編を題材とし、「強くなりたい！」をテーマとした青年医師の生きざまに注目！ また、それぞれ曰く因縁を抱えて離島にやってきた2人の医師の、正反対の価値観の検証もしっかりと。あなたは、どんな医師をご希望？ さて、少女の心臓疾患を「治したい！」と願う彼の思いは、少女に届くのだろうか……？ たまには1週間限定ロードショーの作品にも注目し、自分の目でホントにいい映画を選びたいが……。

なぜ、離島に？

映画冒頭、船に乗って離島に赴任してくる青年医師北岡(真木大輔)の希望に満ちた顔が描かれる。町役場の担当者のお迎えを受けて、彼は直ちに新しい職場となる診療所に入り早速診察に向かったが、私の目にはそんな真面目さオンリーの姿勢がちょっと不安……。歓迎会であいさつに立った診療所長(西岡徳馬)も私と同じ不安があると見えて、「気張るなよ、気張るなよ」とさかんにアドバイスしていたのが印象的だ。

全国的に医師不足が問題となっている昨今、こんな若手のイケメン医師が1人でこんな離島の診療所にやってくるのは、よほどの変わり者か、よほどの事情があるはず。さて、北岡の場合はそのどちら……？ あるいは、その両方が該当……？

美人姉妹との出会いは？

この映画には、美佐代(戸田菜穂)と真央(寺島咲)の美人姉妹が登場する。美佐代との最初の出会いは、歓迎会に出席した看護師の美佐代を、所長がひやかし半分に

「嫁にするんだったら世話するぞ。ただし、島にドクターとして残ることが条件だがな」と北岡に紹介するもの。こんな美人看護師を見て北岡もまんざらではなさそうだが、とりあえずこの場はサラリと……。

他方、北岡に対して「私、不眠症なんです」と明るく声をかけてきたのが真央。真央から「この薬何ですか？」と聞かれた北岡は、「単なるビタミン剤だよ」と答えたが、実はこれはまずかった……？ なぜならこれは、姉の美佐代が「ウソも方便」とばかりに、これは軽い睡眠剤だと偽って真央に渡していたビタミン剤だったから。

その後の触れ合いは？

そんな真央との出会いの中、北岡が「いつかけてきてもいいよ」と言ってケータイの電話番号を書いたメモを渡したのは、ちょっと問題あり。つまり、このような医師と患者の診療所外でのプライベートな接触を誘発する行動は、医師として避けるべきが当然。相手がかわいい女の子となればなおさらだ。まあ、そんな固いことを言ったのでは、映画のストーリーがスムーズに形成できないから大目にみよう。またこの映画では、赴任したばかりの若手医師の「職務熱心のため」ということでプラス評価としておこう。

美佐代、真央と北岡との出会いはこんなものだったが、北岡と美佐代の触れ合いは診療所内でのオフィシャルな関係に限定されるのに対し、真央と北岡との触れ合いは、その後次第に深まっていくことに。さて、その行方は……？

「キリギリス」と「イルカ」、映像的にどちらがベター？

面白いのは、美佐代の話によると真央はイルカと話ができる少女だということ。また、島の入江に現れるイルカは、亡くなった2人の両親の生まれ変わりらしい。北岡は半信半疑でそれを聞いていたが、ある日いつも出かけている美しい入江で、真央がボーイフレンドと共にイルカと話している姿を実際に見てビックリ。

ちなみに、この映画の原作は渡辺淳一の短編『少女の死ぬ時』。そこにはイルカは登場せず、真央の弟が病室に持ち込むキリギリスが大きなポイントになるらしいが、映像的にキリギリスとイルカとどちらがベター？ 言うまでもなく、その答えはイルカ。スクリーン上で観る美しい入江に入ってくるイルカの姿は、映像的にすごく美しい。イルカの人間との会話能力については諸説があるが、イルカの鳴き声は印象的。

さて、塩屋俊監督は、そんなイルカの姿と鳴き声を美術的に、映像的に、そしてまたストーリー構成的に、どのように活用……？

北岡医師 vs. 有津医師 争点は明確！

弁護士もハードな仕事だが、この映画を観ていると医者もハードな仕事だと痛感！また、弁護士もこのタイプ、あのタイプと多様だが、医者も全く同じだと痛感。

なぜこんな離島で働く北岡医師と、北岡の後から島にやって来た所長の後輩の有津医師（杉本哲太）は両極端なタイプで、水と油のよう。そんな違いが顕著になったのは、診療所に運び込まれた急患の手術が必要になった時。こんな時にテキパキ働いてこそ医者の信頼と権威が高まるのだが、北岡は東京でのある失敗を思い出して動揺するばかりだから何とも情けない。そんな北岡を押し退けるように、見事な処置を施したのが有津だった。

北岡と有津の医者としてのスタンスは全く正反対。例えば、真央が重大な心臓疾患をもっていると聞かされた北岡は「きっと助かる！」と励まし、「君の心臓は必ず治す」と宣言するのに対し、有津は「お前は詐欺師か！」と罵り、あくまでドライに患者と向き合っていく。つまり、人道主義者、理想主義者の北岡医師と現実主義者の有津医師との確執、対立だ。

私は断然、有津派！

弁護士もそれは同じで、難しい案件を持ち込んだ依頼人に対して、「きっと大丈夫ですよ。きっと勝てますよ」と言う弁護士を私は認めることができない。もし、私が依頼者の単なる友人であれば、彼を励ます意味でそう言えるかもしれないが、弁護士として事件の勝敗に責任を持つ以上、何の根拠もないまま安心させ、元気づけるためだけに「きっと勝てますよ」とは口が裂けても言えないわけだ。

したがって、北岡が真央の心臓疾患の症状を十分検査せず、またその治療方法を明確に示さないまま、「きっと治るよ。ボクが治してみせる」というのは医者という言葉としてはあまりにも軽すぎるもの。私はそう思うのだが、さてあなたのご意見は？

所長の診たては？

一見傍若無人で、患者に対して絶対北岡のようなやさしさを見せない有津医師がこ

の離島にやって来たのはなぜ？ きっとそこには、北岡医師と同じような曰く因縁があるはず。それはあなた自身の目で確認してもらいたい、私の目には正反対のタイプに見える北岡と有津は所長の診たてによれば、根は同じで似た者同士らしい。有津が心臓外科の権威だと知った北岡は頭を下げて、有津に真央の手術をしてくれと願い出るが、有津は拒否。そして、売り言葉に買い言葉の結果、2人はあやうく取っ組み合いのケンカになってしまうことに。

所長はそんな有津に対して、「昔の自分に似ているから、北岡に辛く当たるのか？」と尋ねたが、どうもこれは凶星のようだ。さすが、島に根づき、一生をこの島の医療に捧げている経験豊かな医者目のたしかさに脱帽！

手術の成否は？ 結果の総括は？

真央の手術を拒否した有津だったが、他方で着々と手を打っていたようで、設備の良い東京の病院での手術が決まったのは万々歳。もっとも、それでも手術成功の可能性は非常に低いから、この手術は一種のバクチ……？ ところがそんな中、突然真央が胸の締めつけを訴え、診療所に担ぎ込まれてきたから大変。そこでできることは、心臓蘇生術だけ。さて、北岡と有津の2人の医師は真央に対してどんな蘇生術を……？

さすが、本職が医者である渡辺淳一の原作だけに、この心臓蘇生術のシーンは見応えがある。とりわけ、左胸を切り開き、そこから突っ込んだ手で直接心臓マッサージをするのはかなりのテクニックを要するはず。それは、途中で「ボクが代わりましょうか」と言う北岡に対して、「この難しい心臓マッサージは百戦錬磨の俺しかできない」と有津が答えていたことから明らかだ。それを続けること何と2時間30分以上。しかし、真央の心臓は動かない。有津の心臓マッサージと同時に口から酸素を送り込む作業を続けていた北岡は、いつまでも諦めず「まだ続行しましょう」と言うものの、物事に限度があるのは当然。こんな2人の医師の懸命の処置にもかかわらず、真央の心臓が蘇生することはなかったが、さて蘇生術の結果をどのように総括すればいいの……？

渡辺淳一の短編集を基に映画化したこの作品では、そんな問題提起がしっかりと観客の前に。さて、それに対するあなたの判断は？

テーマは、「強くなりたい！」

塩屋俊監督がこの映画のテーマとしたのは「強くなりたい！」。そう願うのは、誰よりも心臓病を克服して「生きたい」と願う真央だが、失敗から逃げ出すようにこの島にやってきた北岡もそれは同じ。有津医師からバカにされ自信喪失気味の北岡医師を、重大な心臓疾患をもつ真央が逆に励ましてくれるのだから、北岡が「強くなりたい！」と願ったのは当然。そんな2人の願いは、この映画の主題曲を歌うEXILEの『響～HIBIKI～』の歌詞の中にしっかりと込められているので、この曲にも注目！ また、そんなテーマがしっかり頭に入れば、同時にこの映画のタイトル『きみに届く声』の意味も明らかになるはず。

真央の手術終了後の北岡の選択は、島を離れ東京に戻って再度勉強することだったから、これはある意味再度の現実逃避。ところが、有津がそんな北岡に対して手渡した贈り物とは？ また、所長がその申し出を快く承認し、「待っているぞ」と声をかけて送り出したのはなぜ？

この映画のストーリー展開の中で、今なお発展途上にあることが明らかとなった未完成的な青年医師北岡の想いを、私たちはしっかり受け止め、見守りたいものだ。

手は繋がらなかった方が……

いよいよ今日は、北岡が離島する日。島に降りてきた時と同じ町役場の男が車で北岡を船着場まで送っていたが、途中北岡が別れを告げるため立ち寄ったのが、あのイルカが入ってくる入江。そして、そこには美佐代の姿が。

したがって、この映画のラストを飾るのは、美しい入江の前に立つ北岡と美佐代の2人の姿だ。そこで交わされる2人の会話は、真央が首にかけていたペンダントを軸とした含蓄あるものだが、私が残念に思ったのは、そこで2人が手を繋いだこと。もちろん、北岡は東京で再度医師としての力をつけ、またこの島に戻ってくるつもりだが、それはあくまで医師としての立場であって、美佐代の恋人としての立場ではないはず。2人が互いに心の中でどう思っているかは観客には明らかだが、この先北岡が島に戻ってくるのはさて何年先……？

このような、この先不安定な2人がここで手を繋いでではダメ。ここで手を繋げば、通俗的なメロドラマになってしまうのでは？ 私はそう思うのだが、こんなエンディ

ングとした塩屋俊監督の意図は？

1週間限定のロードショーだが

シネコンシステムが定着した今も、上映館を求める手づくり映画はたくさんある。塩屋俊監督の『きみに届く声』は、一般上映を前提としたエイベックス・エンタテインメント配給の商業映画だが、上映館は梅田ブルク7、1館のみ。また9月20日～26日までの1週間限定ロードショー。そんな扱いとなったのは、もちろんそういう位置づけとされたため。したがって、この映画にはプレスシートもパンフレットもないのは少し残念。

同じ塩屋俊監督の『0（ゼロ）からの風』（07年）は、2007年4月19日にオープンしたばかりのなんばパークスシネマで公開され、その後順次全国を巡回しながら上映し、製作費を回収していったが、『きみに届く声』もそれと同じ道を歩むようだ。そんな『0（ゼロ）からの風』の私の採点は星5つだった（『シネマルーム15』214頁参照）し、『きみに届く声』は星4つの名作。

1週間限定ロードショーという厳しい条件下たしかに観客は少なかったが、私としてはこれはかなりのお薦め作。是非、何かの機会を見つけて鑑賞してほしいものだ。

2008(平成20)年9月24日記